

## □ 書 評 □

水野祥太郎 著

## 「ヒトの足

——この謎にみちたもの」

鈴木 良 平

(長崎大学整形外科教授)

本書の著者水野祥太郎博士は、足の研究家として世界的に有名であるが、この興味ある著書の出版日1984年5月10日に、奇しくも不帰の客となられた。わが国の学会にとって、惜しみても余りある人物を失ったことになる。

著者は戦時中工場医として勤務し、当時の劣悪な労働条件下で発生した足痛患者を多数経験した。この経験に基づいて、立ち仕事と足痛、さらに思春期扁平足へと追究を始めたのが、足の研究に専念する動機であったようである。著者は足アーチに興味を持ち、多くの切断肢を用いての実験的研究も含めて、第20回日本整形外科学会総会(1947年)に宿題報告「産業医学方面より見たる足の問題」として発表した。その記録は物資不足の時代で、日本整形外科学会雑誌22巻にわずか5ページに圧縮して掲載されているだけである。しかしその後この研究は各方面に発展し、1973年には「ヒトの足の研究」として出版された。足の科学的研究書としては、不朽の名著である。著者はその後、ケニア原人の足の化石を研究し、これも加えて本書を執筆した。いわば前記の「ヒトの足の研究」の大衆版ともいべきものである。したがって非常に平易な文章で、あたかも文学書を読むごとく読み始めると次から次へと興味がわき、最後まで読み通してしまふような書物である。

本書はⅠ.足の進化論、Ⅱ.扁平足、Ⅲ.足アーチ、Ⅳ.足の痛み、Ⅴ.足と履物の5部から成っている。

第Ⅰ部は恐竜の化石から始まってヒトに至るまでの、比較解剖学から足の進化を論じている。とくにケニアのナイロビ博物館で、オールドワイ谷からリーキー博士の発掘した猿人よりもヒトに近いジンジャーントロプスの足の化石と対面した著者の喜びが感激的に書かれている。臨床家としての鋭い眼を以て、この化石からケニア原人の生活様式を推定し、ヒト化の過程をさぐるくだりは、読者を人類学の魅力に引き込むことは必定である。

第Ⅱ部では工場医としての著者の体験が基礎となって

書かれた、扁平足の成立に関する見解であり、科学的な足の見方を教えられるところが大きい。戦後飛躍的に改善された労働条件下では、今後著者のような経験をすることは不可能であろうから、誠に貴重な記述である。

第Ⅲ部は扁平足から展開した足アーチの理論的研究で、切断肢を用いての実験が述べられている。ヒトのアーチは極めて堅固にできており、ヒトのヒトたる所以はここにある。

第Ⅳ部は足の痛みと扁平足変形とは必ずしも平行しないことを述べ、足痛の治療については、アーチ支えの適応と、治療体操について詳述されている。とくにアーチ支えについては、著者自らが苦勞して製作した体験から出たもので、われわれ臨床医のたいに参考になるところである。

第Ⅴ部は履物の問題であるが、臨床医として著者ほど履物に造詣の深い学者はいないであろう。学生時代から登山家としてならした著者は、早くから登山靴、スキー靴の改良を行っており、その研究史は古い。わが国古来の履物、屋内での素足の生活が、いかに日本人の足の健康に役立ってきたかを示しているのは、わが意を得たりの感が深い。

以上のような理由で、わが国では足の患者は欧米に比してはるかに少なく、したがって足の研究も遅れをとっていた感が深い。しかし生活の欧風化に伴って、この方面の研究が強く要請される時代になった。一読をおすすめする次第である。なお足について興味ある方のために、下記の書を推薦しておく。

- 1) 水野祥太郎：ヒトの足の研究。医歯薬出版、1973
- 2) 水野祥太郎：オールドワイ谷のヒト科の足。整形外科26:715, 1975
- 3) 近藤四郎：足の話。岩波新書、1979

(A5判 頁300 ¥3,000 創元社刊 1984年)